ともに支え合い高まり合う学びの創造

～共創が育む自己肯定感～

郡山市立芳山小学校　（代表）校長　吉川　和夫　　教諭　鈴木　毅

１　研究の趣旨

本校は創立 116 年を迎えた。その長い歴史の中で、常に子どもたちは「学び」に没頭してきた。時には大きな環境の変化が子どもたちに襲いかかったこともあった。しかし子どもたちの「学び」は揺らぐことはなかった。それは、本校の教育理念「敬・信・愛」を子どもたちや教師、そして地域が受け止めているからなのである。昨年度まで「学びは個に還る」という考えのもと、一人一人の子どもがもつ資質や能力を、対象・仲間・自分との関わりを通してさらに育んでいこうとしてきた。一方で「学び」が真の意味で個に還っていたのか?という疑問が生じてきた。真の意味で「学びが個に還る」ことを確かなものにするために、学びの可能性を探究していこうとする願いが私たちの中で一層強くなってきた。そこで、授業をより深く、広く、多面的に見つめ直し、子どもたちがより課題に没頭し、共に学びを創り上げ、自分の成長を確かに実感できる授業を目指していくことを共通課題とした。

２　研究の概要

(1)　「ともに支え合い高まり合う学びの創造」とは

「ともに支え合い高まり合う学びの創造」とは、授業を仲介として、個のもつ資質や能力が、仲間のもつ資質や能力と交流し合い、それぞれの学びが、より確かに、より深く、より豊かになり、さらには自己肯定感を育む学びととらえた。この前提のもと「対象・仲間・自分」との関わりを大切にした授業を追究する。

①　対象との関わり

子どもたちが抱いた学びへの思い・願いを大切にした「対象」を子どもたちに出合わせ、その学びが確かに個々に還るような単元構想を工夫する。

②　仲間との関わり

学び合いの場を、わかったことを伝え合う場ではなく、創造的な場ととらえた。創造的な学びが展開されることで、育むべき資質や能力がより豊かなものになると考える。

③　自分との関わり

学びの足跡をたどることで、「あと少しの自分」に出合ったり、「成長できた自分」に出合ったりする。これが個々の学びを一層磨き、高めていくための原動力、ひいては大きな自己肯定感につながると考える。

(2)　「共創が育む自己肯定感」具現化のための授業作りの視点

「自己肯定感」とは「ありのままの自分」を感じることである。成長しきれていない自分を受け入れるからこそ、次の原動力を得る。学び続けるからこそ「成長した自分」に出合えるのである。それが新たな「自己肯定感」につながっていく。「学び」は個に還り、「自己肯定感」も個に還る。このような姿を授業の中で表出、具現化するために、「学びを照らす」「学びが見える」「学びがつながる」の３点を授業作りの手立てとして取り組む。

３　成果と今後の課題

(1)　成果

①　「学びを照らす」授業を実践することにより、学習内容が精選され、授業に確固とした軸ができた。そのため子どもたちの「学び」がぶれることなく、確実に展開され、「真の学び合い」に近づくことができた。

②　「学びが見える」ことに留意した授業を展開してきた結果、対象や自分たちの学びの根拠が可視化され、より思考しやすくなったことで、子どもたちの「学び」がさらに深まり「真の学び合い」に近づくことができた。

③　「学びがつながる」場面を授業の核として位置づけたことで、課題を多面的に思考し、解決していくことができた。個々の学びが、集団での学びの中でさらに磨かれ、高められ、個々の資質や能力がより高まる「真の学び合い」に近づくことができた。

(2)　課題

○　教師の最大の使命は「授業力向上」である。「真の学び合い」とは、その授業の毎日の積み重ねにより表出される。日々の授業で、子どもたち一人一人の資質や能力、自己肯定感を育んでいかなければならない。「授業力」を向上させる必要感を切に感じるとともに、毎日の授業の積み重ねの大切さを痛感する。